

五月七日

朝、棚を整理していたら木島安史の孤風院白書がポロリと出てきた。木島さんが亡くなってだいぶ時間が経った。前向きで自己を拡張する努力を惜しまなかった人だった。「孤風院」のネーミングはこの建築家の内面の孤独をフツともらしてしまったものだろう。誰も明日のことは知らない。それぞれの内を知ることもない。飯島洋一から送られてきた現代建築、アウシュヴィッツ以降読んでいた。面白い観点から建築を遠望しているが、この批評家は実体としての建築を感受することへの関心が極めて薄い。書かれた本、発言等から建築的観念を紡ぎ出そうとしている。核心はサイバースペースに関する関心だろう。その現実界からの距離感が現代的なのだろうか。オヤジゆずりの詩的直観ならぬ生身の観念性が書物の形式の中に散乱している印象だ。流動体への関心は独自のものがある。明日より二川幸夫の演習G始まる。この人物の怪物性をキチンと生かすプログラムをまともに考えてみたいのだが。何処かこのスタジオの進行状況を本かビデオにしたいという出版社はいないかね。面白いと思うんだけどネエ。余りの今風からのブツ飛び方が。

カンボジア、ブノンペンから連絡あり、ブノンペンでの五月二七日の講演題目を「ひろしまハウスはカンボジアの町おこしのモデルである。」としたいと伝える。レンガ積みツアーには定員をはるかに超える応募者が集まり、結局四〇名とした。今回参加で

きなかった人達は秋のツアーに参加していただきたい。

十八時前佐藤健より電話あり。東大病院で結果が出た。私のこのメモに佐藤健が登場する事はしばらくは無しにする。私の方に佐藤健のこれからを記す勇氣も気力も備わっていないし、佐藤健の人間としての尊厳は最大限守らなくてはならない。数少ない友人達に、体だけは大事にしてくれと伝えたい。この件に関してはもう言葉の逃げがないのだ。

五月八日

朝肌寒いくらいの冷気。屋上菜園に上り、少しばかり草むしり。植えた唐辛しやピーマン、しそ等が育っている。今日は午前中地下打ち合わせ、午後大学の予定。

十三時中谷礼仁の講義を聞きに階段教室へ。学生との対話形式を取り入れ、何だか建築同好会的であった。痛く失望する。聞かなきゃよかった。学生に媚びている内に考えている事の中核がいかに生ぬるくなってしまっている。十四時四〇分二川幸夫の設計演習G。一時間三〇分の独演会。いつもの通り決して耳ざわりの良い話し振りではないが私には何度聞いても面白い。小才ではない生身のエネルギーそのものが生き生きと語っている。学生は呆気に取られるばかりだろうが、それで良い。受講者が多過ぎるので六月に二〇名程度に絞る。最終的には五、六人だけ残るようなプログラムにするつもり。どの様な記録に残すかが問題だ。ライブだから、空気を伝える工夫が必要だろう。夜、久し振りに難波和彦と飲む。何と彼の事務所は仕事の花盛りらしい。二五件の物件を抱えていると言う。正念場だな。

ヘレンケラー記念塔の宿泊棟をやる事になった。アメリカのヘレンケラー財団とコンタクトしてみる。

五月九日

今日は一日大学だ。明らかに健康に悪いな大学という場所は。